



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2013.6.1 発行 NO.27

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

特別企画 保育のグランドデザイン…序にかえて Part 1

国と地方が制度改革に着手しだした今、「子どもを守る基本的な保育の視点」が置き去りにされないためにも、当研究機構では、21世紀の保育を考える“グランドデザイン”を描き始めています。今年1月に開催された第38回保育総合研修会初日のライブセッションの後、森眞理、久保健太、両委員のお話を伺いたいとの要望もあり、「子ども」について対談を企画しました。今号と次号の2回に分けて掲載します。

■出席者（以下、敬称略）

森 眞理●立教女学院短期大学准教授

久保健太●篠原学園専門学校こども保育学科学科長

“アクチュアリティ”と《リアリティ》 ＝『私の二重性』

久保●21世紀の保育を考えるにあたって、参考になるのが『私の二重性』という、精神分析学者の木村敏さんがされる議論です。

たとえば、流れていく雲を見ますね。雲はゆっくりとかたちを変えながら流れていく。牛になったり、ソフトクリームになったりする。雲に応じて、想像力がふくらむ。人間のほうが、雲の世界に引き寄せられていく。そうして、気がついたら、いつのまにか雲の世界にどっぷり浸かって、“私は、雲の世界を生活している”のです。

この時感じている“生活している感覚としての現実感”、これを“アクチュアリティ”といいます。

一方で、雲はH₂Oであるというのも動かしがたい事実です。つまり、《H₂Oとしての雲というのも、現実》なのです。こうした現実のほうを《リアリティ》といいます。

「私は私である」と感覚を得るには、アクチュアリティとリアリティの両方が必要であるというのが『私の二重性』という議論です。

1つは、“私は生活しているなあという現実感＝体感”

が大事だということ。2つ目は、《〇〇としての私という現実感＝社会的存在》が大事だということ。

私個人でいえば、こども保育学科学科長としての久保健太、研究機構研究企画委員会委員としての久保健太というリアリティとしての現実感があるんだけど、それは、学生と一緒に勉強したり、今、この瞬間、森先生が私の話にうなずいていただいていることから得られるアクチュアリティとしての現実感に裏づけられているんです。

“アクチュアリティとしての自分”と《リアリティとしての自分》のどちらも感じられることで、『私』という感覚が得られる。そういう議論なんです。

子どもについて見てみると、圧倒的に、アクチュアリティの世界で生きている。目の前の木がクヌギであるなんていちいち考えずに、ましてや3歳児としての自分、2歳児としての自分なんてまったく考えずに、目の前の自然に飛びついたり、興味あることに飛びついたり、そうして彼らは自分の現実感をつくっている。

そうであるのに、大人になるにつれて、徐々に社会的な役割などが濃くなってきて、「学科長なんだから」「大人なんだから」と、そういったものばかり求められるようになる。

たしかに、役割は大事なんだけど、アクチュアリティも大事なんです。近代の社会は、リアリティを重視する性格が強かったのですが、21世紀、社会が進んでくれば、アクチュアリティもリアリティもどちらも大事なんだ！という時代がくると思います。そうなると、保育の現場で、アクチュアリティを大事にしてきた保育者さんたちの仕事が、社会に求められる時代がくるのではないかと感じるんです。

学校というのは、どちらかといえば「H₂Oとしての雲や氷」「電気としての雷」というように、すべてのものを意味化して伝える側面があるんですが、保育

というのは、「雲はふしぎだなあ」とか「氷は硬く冷たいなあ」「雷ってすごい音でこわいなあ」など、アクチュアルな感じも重視しています。五感を通して感じるアクチュアルなものを、保育の世界では今後も大事にしないとイケないなあと思います。

森●今のお話を伺って気づいたことが2つあるんです。

1つは、「ライブセッション」のテーマが「グランドデザイン」だったのですが、従来のグランドデザインや保育は、「上からあるべき姿を示そう」としたり、久保先生がおっしゃったリアリティも、こうあるべき！という考えからきているような気がします。私はそういうとらえ方をしないで、「子どもに聞く」というのが始まりであり、終わりであり、未来でもあると思っているんです。

たとえば、今、この子の思いは何なのか、大人にはよくわからない時があります。一瞬の姿や出来事の中に、その子なりの思いや意味を感じて、心躍らせたり、共感したりする。そうしながら、大人は、こうやってほしいとか、こうあってほしいな、ということうまく言葉にすると教育にもなっていく。でも、こうした思い＝アクチュアリティの中に、子どもはファンタジーを入れてくるので、子どものいう言葉に、大人は感心したり、驚くこともありますよね。

もう1つは、「枠組み」で子どもを見ていないかという危惧です。「偽りなき者」というデンマークの映画の話なんですけど、男性の幼稚園の先生の話で、女の子が先生に見てほしいものがあるって、先生に聞いたけど受け入れてもらえなかった。女の子は自分の思い通りにならなかったために、先生が性的なことをした、と嘘をいった。そのために、小さい町なので先生の居場所がなくなってしまうというストーリーなんです。

ここには、子どもは嘘をつかないという神話（枠組み）が基礎にあるのです。子どものアクチュアリティはある意味、したたかなところでもあり、自分を正当化するところもある。でもそれは、子どもが「こっちを見て」というサインを出していたんだ、ということに気づいているかどうか。それは、この子どもに限らず、まわりの一人ひとりについても向き合っていますか？という投げかけ（警鐘ともいえるメッセージ）でもあるように思うのです。

今、子どもと真正面から向き合わないで、すべてが「枠組み」からきているなあと思うことがあるんです。

子どもの遊びの中にはアクチュアリティもあるし、リアリティもある。砂場遊び1つとっても、子ども一人ひとり違うし、その時の場面等でいろいろ変わってくるし、そこに何となく役割があったりする。でも、そこからまた新たな見立てが始まり、いろいろな物語が始まるという見方が欠落して、語られていないように思うんです。ただ、「砂場遊び」をしているとか、「協働的な遊び」とかで終わってしまう。

もっと、一人ひとりが出会ったその場で子どもどうしの世界や物語を語られるようになること。そのことによって、何を大切にすればよいのだろうか？どんな生活にしたらよいのだろうか？ということが、クリアに見えてくるのではないかと思っています。

久保●アクチュアリティとリアリティというより、一人称と三人称といったほうがいいのかもかもしれませんね。一人称（その子の私の世界）をフルに生きるっていうんですかね。それが保障されていない。

森先生がおっしゃったように、子どもは子どもなりの現実を生きており、私はこんな現実を発見したんだよというサインを出しているのに、読み取ってもらえないこと、保障してもらえないことがありますよね。

（テーブルに置かれている動物のぬいぐるみを手に持ちながら）子どもがこのぬいぐるみを見ながら「この熊さんはね…」といっても、「この熊はぬいぐるみでしょ」といわれてしまったり、「この熊さんと牛さんは友達なんだよ」といっても、「それはぬいぐるみなよ」なんて、三人称の世界に戻されてしまう。

それは極端な例かもしれないけれど、一人称の世界が尊重されていないという感じはします。ものの意味の世界ばかりを重視して、そこから逸脱するものを嫌うというのは、社会全体に感じる風潮でもあると思いますが。

「差異」と「逸脱」を受けとめられますか

森●違うものに対して、“面白い”といえるか、いえないかで保育って全然変わってくると思うんです。違うものが、何で違うんだらうって、そこから始まる。

私にとって、子どもってそうだったんです。異質な存在で訳がわからなくて、だからこそ知りたいし、教えられることもあるし、でも今、そのことが排除されたり、カテゴリーに分けられたりしている。たとえば、

牛さんは、もしかすると自分が思っている牛さんじゃない時もあるし、というところが保障されていないと思うんです。

久保●英語でいうとディスオーダー (disorder: 逸脱) が大事にされていない。オーダー (order: 秩序、規則) ばかりが大事にされているということですね。

森●ロンドン大学の名誉教授、ピーター・モス氏は、ある国際会議の時、ディセンサス (“Consensus” 「意見の一致」「合致」「合意」の反対語であるとした、モス氏による造語) について話されたんです。

すぐに、「意見を一致しようよ」「合意を」と始めたがるけど、まずは、不一致からではないか、そういうところに面白さを見出せないというのが近代だ、と。みんな、「コンセンサス」といってすぐにまとめるが、彼は「ディス」をつけることで、そこを打ち破ったんですね。

久保●現在は、コンセンサスばかりが求められ、合意することがよいことだという風潮があります。モス氏は、合意ばかりを求めらる中で、差異や違いが無視されることに対して警鐘をならしているわけですね。

森●差異を見ることによって、もしかしたら、逆に、そこにコンセンサスが見えてくるだろう。ダイバーシティ (多様性) の中にあるユニティ (統一性・総合性)、ユニティの中にあるダイバーシティは、今、保障されないといけないと思うんです。

久保●制度にとっても、重要なところであるように思いますね。

森●保育園、幼稚園、認定こども園など文化が違うのは、歴史的背景があるので、ある意味、当たり前だと思うけど、子どもがどう育っていくかが語られないで、箱ものばかりがいわれていることが問題だと思います。箱ものも大事ですが、それよりも、保育者が子どものことを語れることが大事です。

語れる力を育て、育ち合う機会や場所が保障されなくてはいけないと思いますね。

久保●差異に面白さを見出すには、自分に対する基本的な信頼感が必要だと思います。

自分とは違う考え方の人を見て、この人を受け入れても自分が崩れないだろうと思える。自分の世界が崩れたとしても、よい意味で崩れるのであって、根本から崩れるわけではない、むしろ新しい世界へのきっかけになるだろうと思える。自分の世界に対するそうし



た信頼感がないと、差異を受け入れることができないのではないかと感じます。これこそは、保育者自身の肯定感の問題でもあります。

ある程度、余裕のある人のほうが、子どもと遊ぶ時にいい具合に脱力できている。だからこそ、子どもの世界を受けとめることができている。保育者自身が自分の世界を保障されていないと、つまり、「あなたのままでよい」といわれていないと、自分とは違う子どもに対して、「あなたは私と違ったままでよい」といえないと思います。

森●違いのある子や人に会った時は、すぐに面白いとはいえない。嫌悪感を持つこともあるかもしれないですが、「ありのままでよいのだ」という揺るぎない信頼感、「あなたの存在はかけがえない！」というのが保育だと思うんです。それが、保育の土台になると思います。

保育はある意味、差異がはっきりしていますよね。嫌なことでもいい合えるし、それがもっとできる場であってほしいんです。

保育の世界が持つ可能性

久保●これは、保育の世界が持つ可能性だと思うのですが、子どもが逸脱的な行為をするとしても、それはまったく見ず知らずの逸脱者がいきなりやってきて、逸脱的な行為をするわけじゃないんです。そういうところが、ユニティの中のダイバーシティにつながるのではないと思うんです。余裕を持って、差異を受け入れてもよい。それが体調の悪いことに気づいたり、その子がその日、お母さんにかまってもらえなかったことに気づいたり、そういったことにつながるとも思

うんです。

その子の「普段」を知っているからこそ、その子が発する差異に気づけるし、逸脱をキャッチできる。それは、保育の世界が持つ可能性です。差異や逸脱の取り扱い方について、社会の側が、保育の世界をモデルにする日もくるかもしれません。

その点で、私は規模が大事だと思っているんです。適切な規模であれば気づけるものが、一人で大人数を見ると、気づけなくなるでしょう。

森●グランドデザインを別の視点で描くなら、イタリアのレッジョ・エミリアをはじめ、先進国の保育は、4～5歳児の1クラス、15人を2人の保育者で、レッジョでも25人のクラスに2人の保育者が常駐していて、しかも年間のインターンがいたりします。

人的配置、そこに力を入れないと、子どもも大人も育たないと思いますね。

久保●それって、大きな課題ですね。

保育士の配置基準の問題だけではなくて、インターンシップのあり方や実習生の受け入れ方について、そして、そこで、どのような営みがなされているか、それが大事なのです。

そこで今回は、このことについて語り合いたいと思います。

編集後記

◎しっかりした『子ども観』の形成をめぐる

今回の対談は、テーマとしては、一見、シンプルですが、内容としては、大そう深みのあるものになりました。現在進行中の『大規模な制度改革』は、“子どもとは何か”という根本的な論議を中心にすえて進められているとはいいい難く、憂いを感じる保育関係者も数多くいると思われます。保育現場からは「しっかりした“子ども観”に基づいた制度にすべきだ！」と訴える声が聞こえます。

では、そのしっかりした“子ども観”は、いつ、どこで、どのように形成されるのか、という問いに、我々、現場は、どう答えればよいでしょう。国家としての「子ども観」を定める、その一方で「民間の独自性」という名のもとに、各園が、それぞれの思いや方法で実践している、そんな八百万の保育（子ども観）を是とする考え方が潜在的に多数を占めているように思われます。

「グランドデザイン」は、そんな日本の保育の現状に対して、「こども指針づくり」や「解説書づくり」など、従来の文書型表現とは異なる手法で、メッセージを届けようと、作成の緒についたところです。社会全体を見渡すと、個よりも集団や組織の枠組みが尊重され、改革よりも伝統的な枠組みを重んじる風潮が強く、それが、保育実践や子ども観にも色濃く現れているといつてよいでしょう。

森委員は「枠組み思考」から抜け出して、差異（ちが）いや逸脱を面白いと感じられるようになることが、保育の根本的なテーマであり、その子その子と徹底して向き合い、その子その子を語り合う日常が園文化になることで、しっかりした『子ども観』の形成につながる、と「ボトムアップ思考」を提唱されているように思います。

また、久保委員の「差異や逸脱の取り扱い方について、社会の側が、保育の世界をモデルにする日もくるかもしれません」という主張は、封建制の残る日本社会が変われば保育も変わるという従来型思考ではなくて、逆説的にその子その子を語り合う保育を重ねて、しっかりした『子ども観』を形成する取り組みが日常化すれば、日本社会全体も進歩する、という保育園の新しい役割についても言及されています。

次回（続き）が楽しみです。

（片山喜章●神戸市・はっと保育園園長）

◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp